

---

# 月光

袖月レイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月光

### 【Nコード】

N1155V

### 【作者名】

袖月レイ

### 【あらすじ】

異世界ファンタジー。

時機は、戦国。その里には、一人の少女が住んでいた。天才的な暗殺技術を持つ少女、イリア。これは、その少女と、少女にまつわる物語。それは、儂くも愛しい物語。

## 序（前書き）

注意！PG - 12！

\*このお話には一部暴力描写、生々しい死体の描写がありますので自己責任の下でお読みください。読んでからの苦情は一切受け付けられませんのでご了承くださいませ。

## 序

錆びた鉄の匂い。

止む気配のない雨の音。

ぬかるんだ足元。

転がる武器の数々。

無数に散った手足。

そして、緋く染まった己の両手。

月光

月も星も風もない、真つ暗な雨の夜。

そんな中にただ一人、佇む影があった。

深い闇色の短髪に、鈍った刀身の右目と、曇った夜空の左目を持つ少女だ。

まるでその身から光が漏れているのではないかと錯覚するほどに白い肌。それに纏うものは黒い衣と裾の長いマントで、それは雨とその場に転がる死者たちの血とを吸って黒さを増し、とても重そう

だ。  
表情の無いまま、少女は両手に握る短剣を両足の太腿に括りつけた鞘におさめる。

無惨に切り裂かれた手や足は雨でぬかるんだ土に少しずつ埋められてゆき、胴と切り離された頭は何か悲痛な叫びを刻んでいる。

それらを一瞥すると、少女は身体を反転させて歩き出した。全身に浴びた赤黒い血は歩く度に雨が流し、消してゆく。

黒ばかりのその中で、少女の赤い唇が雨に濡れてつややかに輝き、まるで珠玉のようだ。

一度も振り返ることなく。

歩く速度を変えることもなく。

そのまま、少女は雨夜の闇に消え去った。

\*  
\*  
\*

時機は、戦国。

その里には、一人の少女が住んでいた。  
天才的な暗殺技術を持つ少女、イリア。  
これは、その少女と、少女にまつわる物語。

それは、儚くも愛<sup>かな</sup>しい物語。

巻 the fate of the moon 前(前書き)

注意! P G - 1 2 !

\*このお話には一部暴力描写、生々しい死体の描写がありますので自己責任の下でお読みください。読んでからの苦情は一切受け付けられませんのでご了承くださいませ。

卷 the fate of the moon 前

漆の塗られた木の扉を強く叩く音が家中に響き渡る。木の平屋。その一番奥の部屋で夢の世界へ旅立っていた住人は、あまりもの煩さに掛け布団を頭から被った。

音は止まない。

「イリーアー。イリアー！居るのは分かってんだよ！開ける！」

そんな声まで届き始める。観念して住人はむくりと起き上がった。カーテンの隙間から差し込む日は眩しく、今がもう一日を半分過ぎようとする頃だと知らせる。枕元の窓のカーテンを開け、すっかり緑を失った庭の木々をぼんやりと眺める住人は、つややかな短い黒髪を黒塗りの爪でガリガリと掻いた。

まだ眠たげな眼の色は左右で違う。右が灰で、左が藍だ。

未だに鳴り止まない声と音。けれどひどくゆっくりとした動作で住人は洗面所へ向かう。夜着の上からでも分かるしなやかな体躯と細く長い手足をもつ少女だ。未だ閉じそうな眼に目を覚まそうと顔を洗うと、長い睫毛から水が滴る。通った鼻筋の下の紅い唇も、水に濡れて少女とは思えぬほどに艶やかだ。

その一つ一つの動作はしきりに呼ばれているというのに少しも慌てた様子はなく、至ってマイペース。やっと扉へ向かった彼女が気だるげにノブに手を掛け、鍵をあげてゆっくりと扉を開きかけた次の瞬間、何かが勢いよくそれを引き開けた。

「イリアー！」

「…うつさい…」

扉を叩いていたのは背の高い少年だった。

明るい金髪に、少しつった茶の双眸。元気のよさそうな面立ちの少年だ。鮮やかな青の衣の上に黒いマントを纏う身体は鍛え上げられており、露出された手足のそここに傷跡が見受けられる。

「うつさいじゃねーよ。お前今日の報告会またすっぱかす気か？」



「ああ…忘れてた…」

まだ半分意識が夢の中にいる住人イリアに、少年は呆れたように大きく息を吐いた。

「…忘れんなよ…」

嫌そうに眉間にしわを寄せ、イリアは癖のない髪を掻きながら居間へ入る。慌てて少年も追いかけて、椅子に腰掛けてテーブルに打つ伏せるイリアの前に座った。

「なあ、イリアー」

「うっさいなア…。あたし昨日仕事だったんだからも少し寝かせてよ…」

「また？ここんどこ毎晩じゃん」

「知らないよそんなこと…。おやすみ」

そして、イリアは静かに寝息を立て始めた。

「怒られんのは俺なんだけどー…」

泣き出しそうな少年の声は無情にも音のない家に溶け消えた。

「カルサ！イリアを連れて来いと言ったろう！」

周りが木ばかりの森の中にある小さな里、ラスラ。四角く切り取った大理の白石で作られた建物を中心に平屋が円形に建ち並ぶ。

この里は暗殺業を営む里だ。

今は戦に強い者が勝ち昇る時代、つまり戦国時代だ。ゆえに、暗殺業を営む里はここだけではない。そのような里が数多く存在し、互いに対立し合って己の里が最も強いことを証明するために争い合う。

その中でもラスラは上級クラスに位置する里だ。里の中央の白い建物は司令塔と呼ばれ、家がそれに近ければ近いほど位が高い。そして、最上級の強さを認められた、最も司令塔の近くに住むことを許された者たちはその証として右手の甲に紅い蜘蛛の入れ墨が彫ら

れる。

里は極力外部に分からぬようと大抵は森の深く暗いところにあり、人々は日々死と隣合わせに暮らす。その為、人々は己の腕を磨くことに命をかける。イリアも、金髪の少年カルサも、そんな日々の中生きてきた。

今は、強くなければ生きてはゆけぬ時代なのだ。

「だって起きないんすよ」

「だってではない！起きなければ起こすのだ！」

白く立派な髭を蓄えた司令塔の副総長が言うのに、正方形に向かい合って座る蜘蛛を持つ者たちも相槌を打つ。

「…分かりました。行きやーいーんでしょ」

そう返すカルサにすかさず彼らの内の一人がたしなめた。

「こらカルサ！何だその口のきき方は！」

「へエイ」

カルサは至極面倒臭そうに返事をし、報告会が開かれている司令塔の最上階である四階を後にする。

「毎晩のよーに働かせてんのはダメエらだろ」

小さく吐き捨てられた言葉は、誰にも聞こえることはなかった。

ふと見た窓からは昼下がりの里を撫でる風が木々の葉を散らせてゆく。

「カルサまた来たの？」

「起きてんじゃん！！」

所変わってイリアの家。

再び扉を叩いたカルサを迎えたのは、濃い紫の外出着に着替えたイリアだった。テーブルにうつ伏せたまま眠ってしまったイリアを寝室まで運んだ記憶がまだ鮮明なカルサは予想外の出来事に思わず突っ込んでしまった。不覚だ。

「何？起きてちゃいけない？」

表情を変えぬままのイリアはいささか不満そうだ。

「いや…副総長が司令塔に来いって…」

「分かってる。そんな何度も来なくても行くよ」

「じゃあ来いよ！頼むから！」

「うっさいなあ…カルサは」

言いながらイリアは黒いマントを羽織る。このマントが司令塔へ入るときの通行証の代わりとなるのだ。マントの肩には蜘蛛の刺繍が施されており、階級によって色が異なる。最下級が茶で、上に赤、紫、青、白、銀ときて、最上級が金だ。銀以上の蜘蛛は見せるだけで様々な免除が受けられる。それは商店での売買の値や、病院での医療費など金銭的なものが多い。

そんな銀の蜘蛛が施されたマントを着たイリアは、テーブルに頬杖をつくカルサに冷たく言い放つ。

「いつまで居る気？鍵閉めるから出てって」

「いーよもう。また来んのも面倒だからここにいる」

言って、カルサはハツとした。

「あ、やつぱ帰…」

「やだー！カルサつたらあたしが居ない間に家を漁る気ね！？目的は何？宝石？お金？あ！もしかして下着！？イヤーフケツ！」

「違っつっの！んなわけあるか！！！」

カルサの反応に満足したように笑って、じゃあねーと言ってイリアは出かけていった。

主の居なくなった家の中で、青い刺繍のされたマントを脱ぎながらカルサは大きく息を吐く。

イリアの補佐役を命ぜられて早三年。彼女の事は今だによく掴めない。何事にも無関心で、いつも気だるげな表情をしているのに、そうかと思えばちよつとした事で突然可笑しそうに笑ったり。窓の外を見ながら真面目な顔付きで何かを考えていたかと思えば、その表情のまま、

「あ、犬が交尾してるー」

などと呟いたり。

カルサはこれを聞いて飲んでいた茶を吹きだしてしまった。一体彼女は何を考えているのだろうか。補佐役として行動を共にする身としてはいい迷惑だ。

カルサの家はイリアの家の裏側にある。元々はもつと里の外側に住んでいたのだが、第四階級に昇級し、イリアの補佐役を命ぜられてから家移すことを強制された。

ここは以前住んでいた場所より治安がよく、生活の便も良いので生活に支障はない。…のだが。司令塔に近いせいか四六時中監視されているようです。こぶる心地が悪い。

イリアはもう五年ほどここに住んでいると言う。その前も少しだけ外側の場所に住んでいたと言うのだからもう慣れてはいるだろうが、十年以上も監視され続ける生活というのも想像するだけで息苦しくなる。

それが、彼女の性格に影響しているのだろうか。

「…んなわけねえか」

一人呟き、カルサは再び大きく息を吐いた。  
いつの間にか日は傾き始めている。

巻 the fate of the moon 後(前書き)

注意！PG-12！

\*このお話には一部暴力描写、生々しい死体の描写がありますので自己責任の下でお読みください。読んでからの苦情は一切受け付けられませんのでご了承くださいませ。

## 巻 the fate of the moon 後

ただ白いだけの壁が続く司令塔。その最上階にただ一つ造られた部屋の、大きく切り取られた窓からは暖かな陽射し。

円柱のようなその部屋の中で、金と銀の蜘蛛を持つ者たちは集っていた。

「イリア！遅いぞ！」

「申し訳ございません。以後気をつけます」

背筋を真っ直ぐに伸ばし、イリアはこたえる。

部屋に居る十数名が何か憎悪にも似た感情のこもる目で自分を見ているのを感じるが、そんなことにはもう慣れてしまった。この中で最も若い自分を好ましく思っていない者が多いことも分かっている。

銀の蜘蛛：第二階級は大抵は十数年ものキャリアを積んでようやく手にすることのできる階級だ。それを十二歳という若さで茶の蜘蛛を持つことを許された少女が、たった二年で手にしたことが気に食わないのだろう。

事実、イリアがそれを手にするまでの最年少は二十一歳だった。それだつて充分若いと言うのに、十四歳の少女がいと簡単に手にしたとなれば何か裏があるのではと疑う者がいるのもおかしくはない。

しかし、当のイリアは銀の蜘蛛がほしくて仕事をしてきたわけではない。イリアにとって、仕事は命ぜられているからこなすだけのものだ。だからなぜ周りがこんなに騒ぎ立てるのがかがいまいちよく分からない。

「さてイリア。南東の里、アイリスカで不審な動きをする者たちがいるようだ」

もう六十むそをとくに越えた副総長が口を開いた。横から銀の蜘蛛を持つ中年の男が口を挟む。

「同盟を結んでいるあのアイリスカですか？」

「うむ。何やらグディアと同盟を結ぼうとしているようなのだ」

グディアとはラスラの東側にある里だ。この二つの里は『ラスラ』と『グディア』という里の名が付くそれよりもずっと昔から互いに競い合い、憎み合っている。

三年前、アイリスカはラスラとそんな関係にある里と同盟を結ぼうとしていた。アイリスカは非常に財源豊かな里のためラスラはグディアに先を越されまいとアイリスカと同盟を結んだ。ちょうどイリアが第二階級に上がったときのことだ。当時、アイリスカでちょっとした混乱が起こったと後に聞いたが、それが真実かどうかはイリアは知らない。

もし、アイリスカとグディアが同盟を結んだ場合。位置的に近いグディアのほうが武力のないアイリスカを吸収してしまうのは時間の問題だろう。そうしてグディアはラスラを攻め入ってくるに違いない。

そうなったらラスラが減ぶことは確実。それだけは避けねばならない。アイリスカの財力はそれほど大きい。もしアイリスカに武力があつたのなら、きつとラスラも、グディアも、程ない時間で吸収されるだろう。

だからこそこの近隣の二里は互いよりも早くアイリスカを味方につけることに全力をあげている。

「そこでイリア。早急にその中心人物を始末せよ。一覧はこれだ」  
言つて、紙束をイリアへ渡す。めくるとそこには三人の男の肖像とその役職や簡単な経歴、最近の動向などが記されていた。簡単に目を通し、イリアは再び副総長へと顔を上げる。  
「御意」

視界の横で、真青の空が赤紫とのグラデーションに変わっていくのがちらりと見えた。

「今回は其方一人の力では足りぬやも知れぬ。カルサを必ず連れて行け」

「いいえ。私一人で充…」

「連れて行くのだ」

低い声はよりいっそう低く、即座に言葉を返したイリアの声を遮った。思わず黙ってしまったイリアに副総長は続ける。

「其方が毎回カルサを連れて行っていけないのは分かっている。何の為に補佐をつけたのか分かっているのか？それでは意味がないではないか」

外の音はまるで入ってこない、この空間だけ隔離されてしまったのではと錯覚する建物の中。

集まった人々は口を開かず、小さく動くその衣擦れの音でさえ響き渡るようだ。

先程とは一転して柔く、優しい声音で副総長は言う。

「私は、其方のことが心配なのだよ。イリア」

けれどそれが建て前だという事をイリアは知っている。

無意識の内に右手の蜘蛛に手をやっていた。彫ったときに感じた激痛は、今はもうない。まるで生まれたときからそこにあっただかのように馴染んでしまっている。

細く小さく息を吐く。

「…承知致しました。命は、以上でしよつか」

暗い灰色と深い藍色。その双眸で、副総長を見据える。

「うむ」

聞いて、イリアは深く頭を下げた。痛みのない黒髪がさらりと、裾の長いマントがゆらりと、同時に揺れる。もう一度副総長に目を合わせると、身体を反転させて真っ直ぐ扉へと歩きだした。

沓の音が響く。

扉は、重い音を立てて閉まった。

突如、漆塗りの扉が音を立てて開いた。夕食の準備をしていた力



ルサは驚いて身を震わせる。

「お、おかえりイリア。どうした？」

マントを脱ぎ、その動作ですら面倒くさそうにイリアは声の主へとちらりと目を向けた。

「ああカルサ。まだいたんだ」

その声にしむつとして、料理担当を俺にしたのはお前だろ、と思いつつ、けれど黙ってカルサは作業を続ける。どうやら機嫌が悪いらしい。障らぬ神に祟りなし、だ。

イリアはパサリと薄い紙束をテーブルへ落とし、マントを椅子にかけてそれへ座る。テーブルに片肘を付いて顔を乗せ、癖のない髪をかき上げて大きく息を吐いた。

「仕事」

「また？」

「また」

どうやら夕食を作り終えた様子のカルサが力作のそれらを両手で運びながらやって来た。

「次はどんな？」

「アイリスカのお偉いさんを殺せって」

イリアは指先で最初の項をめくり、一覽をカルサに見せるようにして持ち上げる。

「それはまた面倒そうだな」

テーブルに料理を置くと、カルサは再び台所へ料理を取りに戻る。

「あ、今回あんたも一緒だから」

「え？」

今度は同時に四つの皿を運びながら来たカルサは、思わず聞き返してしまった。だって自分はもう何ヶ月も仕事に行っていない。

「死なないように頑張んな」

けれどイリアは何でもない事のようにさらりと言って、紙束を向かい側に座ったカルサに投げ渡した。

「死なないようにって…。いつ？」

どこか不安げな表情を浮かべながらカルサはその紙束に目を通す。  
「明日。早急にって言われたし。明日はその三人で同盟締結の条約  
決めるみたいだからその時」

先程ちらりと見ただけで内容は覚えてしまったようだ。

「明日…」

刻むように小さく呟く。

本当はもう少し準備をしたかったのだけれど。

「何、緊張してんの？」

くすりと小馬鹿にしたような笑い。かつとなって思わずカルサは返す。

「んなわけねーだろ！」

「どーだか」

意地の悪そうな笑みを目の下に刻んでカルサを見、ふふんと鼻で笑った。

「馬鹿にすんな！」

「はいはい」

憤慨するカルサを軽くあしらひ、出された料理に手をつける。

今日はレモンの香りのソースがかかった鶏のソテーがメインだ。  
他に裏庭で作っている野菜のサラダと、オニオンのスープがついて  
いる。鶏のソテーを小さく切り、それを口へ放るとソースの香りが  
口いっぱい広がった。

カルサは何やら必死な様子で紙束を隅々まで読んでいる。無言で  
料理を食べ続けていたイリアが口を開いた。

「大丈夫、あなたはあたしが守ってあげるから」

驚いてイリアを見ると、ちょうどオニオンスープを口にしている  
ところだった。

外では鈴虫の鳴き声がせわしく聞こえ、月が痩せた庭木を照ら  
している。

**式 i n a d a r k m o o n 前(前書き)**

注意！P G - 1 2 ！

\*このお話には一部暴力描写、生々しい死体の描写がありますので自己責任の下でお読みください。読んでからの苦情は一切受け付けられませんのでご了承くださいませ。

式 in a dark moon 前

ようやく深い眠りについた頃。

イリアは夢を見た。

己の家から少し先へ行つたところ、まだ暗い鎮守の森の奥で楓の葉がひらりひらりと旋回して地に落ちる。一枚、また一枚。葉はゆつくり、けれど途切れることなく落ちてゆく。

冬に差し掛かる、秋の終わりの風景だ。

そんな中。ある一つの楓の木の下に六歳ほどの童がうずくまっていた。映像は、その姿を捉えるとすぐさまクローズアップする。

腰元まで伸びた長い黒髪を持つ女童だ。

泣いているのだろうか。それとも、眠っているのだろうか。抱えた膝頭に額をつけて、女童は座っている。

カサ、音がして、映像に大人の大きさの脚が入った。深いグレーのコートを着た中年の男だ。彼は女童の前に立つと、そこにしゃがみこんだ。

「どうしたんだい？」

問う声音は穏やか。

ちようどさらりと風が吹く。それに乱された白髪混じりの灰髪を男は片手で撫で付けて直す。

「こんな所にいたら風邪をひくよ。家へ帰りなさい」

男の声に、女童はゆつくりと首を左右に振った。

「……帰りなさい」

再度言うが、女童は左右に首を振る。男は困ったように、呆れたように大きく息を吐いた。

「帰りたくないのかい？」

やはり女童は首を左右に振る。

「帰れないのかい？」

聞いて、ハツとした。違う。そうではない。

「……家が、ないのかい……？」

女童はゆっくりと首を縦に振った。その髪に旋回した楓の葉が落ちてすべる。

まだ日は落ちていないというのに暗い森はどことなく不気味だ。

この女童は、ずっとこんな所にいたのだろうか。

「……顔を上げなさい」

その声に誘われるように女童は顔を上げた。それを見て男は言葉を失った。思わずその顔を凝視する。

女童は、左右で色の違う瞳を持っていた。

雪雲色の暗い灰の右目と、雨夜色の深い藍の左目。

男は息を呑んだ。虚ろで光の射していないその双眸は、あまりにも妙なオッドアイで、美しいコントラストを持っていた。わずかに震える唇で呟くように問う。

「…名は…？」

女童の乾いた唇が動く。

「…」

急に意識が引つ張られるように覚醒した。

耳を澄ますともうすぐそこまで秋声が聞こえる。

夢と現の狭間を切り裂くように研ぎ澄まされた意識は、いつの間にか降っていた大粒の雨が窓を叩きつける音によって現へと引き出される。

雨のせいで急に下がった気温が寝起きで火照った身体を襲い、寒さに思わず身震える。

身を起こし、窓を覆う布を開けて見上げればそこには己の左目と同じ空。

「…嫌な色」

呟いてイリアは枕元の棚に手を伸ばし、薄闇の中、鞆炉に手をか

ざす。すると、ボツと小さな音がして火が灯った。

同時に時知らせの鐘の音。それが三つ聞こえて、今が寅の刻だと知る。

ぼんやりと炉を見つめる。まだ眠いが、何だか眠れる気がしない。先程まで見ていた夢の内容が妙にはつきりと頭に浮かぶ。あの女童は自分だ。嫌な夢を見てしまった。ずっと追憶の彼方に去ってしまっていた記憶だ。

寝癖の一つもついていない髪をかき上げてイリアは大きく息を吐く。

「…気持ち悪い」

外では、せわしなく降る雨の音。

キラリ、と光を放って雫が落ちる。

オレンジ色の太陽が空を美しいグラデーションに染め上げて、地平線の彼方に落ちようとし始める。

ぬかるんだ足元。転ばぬようにと一步一步確かめながらイリアは歩く。向かうのは鎮守の森だ。

楓の木が所狭しと根を張るその森の入り口でイリアはピタリと足を止めた。見上げる楓の葉はまだ木にしがみ付いており、無数の雨粒がオレンジ色の光を受けていくつもプリズムとなっている。

夕日色に染まった楓の葉が旋回するのはまだもう少し先のこと。

夢は、一日が終わろうとしている今もまだ鮮明に脳裏によみがえる。

ずっと、忘れていたのに。

唇の動かぬまま呟いて、イリアは一步、森へ入った。

葉が付いた木々が屋根の代わりとなつてか、森の土は通ってきた道ほどぬかるんではいなかった。ただ、湿った匂いが充満している。太陽光を遮る森は薄暗いが、闇の中で活動することに慣れてしま

っているイリアにとってはさほど問題ではない。

鳥もいない、動物もいない、ひっそりとした鎮守の森。足元に生えるのは草花ではなくキノコやコケで、生きる物は虫や微生物だ。

しばらく歩くと夢の映像と似た場所に出た。ここは、まるで何かに取り除かれたかのように円形に空間ができている処だ。

中央には榊岩と呼ばれるこの森の神を祀った岩があり、この周りの木だけ他のものより幹が太くて背が高い。

ここにはあれ以来きていない。あの時と何も変わらぬ映像。けれど懐かしさも何も感じない。

何故だか他人事のように感じて、イリアは自嘲気味に嗤った。

「何を求めてきたんだか」

それはイリアにも分らない。十年前のことを思い出し、その思い出に浸る気でもいたのだろうか。

「…馬鹿みたい」

呟いて、イリアは踵を返し、元来た道を歩きだした。

オレンジのグラデーションが次第に空を覆い始め、太陽はいっそう赤味を増す。その光を背中に浴びながら歩く横顔には何の表情もなかった。

空はすっかり夜の色に変わり、昨夜とは打って変わって星がまばらに煌いている。浮かんだ月は望月の過ぎた十六夜だ。

灯りのない家の中で月明かりを頼りにイリアは身支度を整える。

黒の上下に銀の蜘蛛の刺繍が入ったマントを着て、沓も仕事用の黒の足袋に替える。

マントの下の、黒い布で覆われた両の太腿には短剣を括り、胸元にはいくつかのナイフをしまった。

全ての準備を整え、居間へ足を運んだちょうどその時、漆塗りの扉が小さく叩かれた。

開けば、そこには仕事着に身を包んだカルサ。

「準備はもう良いの？」

「おう」

「昼間散々練習した成果を出せるようにね」

「なっ…！」

見られたくなかったところを見られてしまったカルサが思わず声を上げるのを横目に、くすり、と笑ってイリアは外に出る。

雲のない空、風のない空気、明かりのない視界。

「行こう」

音もなく、二人は走り出した。



**式 i n a d a r k m o o n 後(前書き)**

注意！P G - 1 2 !

\*このお話には一部暴力描写、生々しい死体の描写がありますので自己責任の下でお読みください。読んでからの苦情は一切受け付けられませんのでご了承くださいませ。

式 in a dark moon 後

鐘の音が聞こえる。

財力が非常に豊かな里、アイリスカ。

けれど武力の乏しいこの里は、少しでも気を抜けば簡単に攻め落とされてしまう危険と常に隣り合わせでいる。

だからより強い里と同盟を結び、里を護ってもらうのだ。

そこら中にラスラの防護が張られた里。

その外れの、ひっそりとした一角には平屋が五つほどまとまって建っており、それぞれの部屋の灯りには数人の男達の影。

「…考えたな…」

夜闇に紛れて、その全てを見渡せる位置からイリアは小さく呟く。まだ落ちる予定のない秋の木々の葉が彼らを隠し、守る。

五つの建物には全て門番が二人ずつ立っており、影の数も皆三つ。これではどの建物に幹部らが居るのか分からない。

はあ、とイリアは面倒臭そうに大きく息を吐いてそしてやはり面倒臭そうに髪をかき上げた。

全てを奇襲するか？いや、それでは身代わりの相手をしているうちに逃げられてしまう。それはラスラの生死に関わる。

「ちっ」

面倒臭い。

「イリア、どうする？これじゃどれが本物だか…」

「分かってる。少し黙って」

声荒げに、けれど空気を震わさずに返す。

そうだ、今回はカルサもいるのだった。いつそ一人ならよかったのに。

そんなことを心内で呟いて、その直後、あることに気が付いた。門番の階級が違う。

ラスラに階級があるように、アイリスカにもやはり階級がある。

鎧の紋様。それが階級を示す証だ。

全てに均等に門番をつけたつもりだったのだろうが、所詮は武力の乏しい里。一つだけ、簡単には門番として雇えぬ階級の者が護る建物がある。

影を覗けば冠の形が肖像と同じだ。

「カルサ」

「え？」

「あの、一番右側の建物。あそこに幹部が居る」

「分かったのか？」

「分かったから話してんでしょ。黙んな」

威圧的に言われ、カルサは不覚にも怯んでしまった。大きく頷いてイリアが示す方向を見る。

「いい？まずはあそこの三人。他のも全員殺すから誰一人として逃がさないこと。足に怪我を負わせて」

「…分かった」

「ごくり、生唾を飲み込んでカルサは頷く。

「緊張してる余裕はないよ。肩の力抜いて」

大きく首を縦に振るカルサを横目で確認し、イリアは小さく声を上げた。

「行くよっ」

突如、風が起こった。

かと思うと銀の閃光が視界を横切り、声を上げる間もなく見るもの全てが緋に染まった。一瞬だけ見えた、頭の無くなった己の身体

「何奴っ！」

それと同じ鎧を纏った大柄な男がさかさ腰元の剣を抜くが、それよりも一瞬速く銀が視界を覆う。ごろりと転がる身体と頭。

それを一瞥もせず、イリアは建物の中へ駆け入る。同時に、五十

を越えた三人の男の視線が集まった。

「何者だ！」

剣を抜く速さはさすが幹部といったところか。

すでに緋に染まった左右の短剣を目線まで上げ、にこりとイリアは天使のように微笑む。

「皆様の命を頂きに参りました」

直後、その背後で違う男の声がした。

「貴様、武器を捨てる！」

隣の建物の門番が異変に気付いてやって来たのだ。

ちらりとイリアがその男を見た瞬間、幹部の一人がイリアに向かって切りつけてきた。イリアは床を蹴り上げ、剣の切っ先で弾みをつけて天井に足を伸ばし、蹴る。床に着地したと同時に門番と幹部の緋が散った。

一瞬の間もなく残りの幹部も刃を向けた。そして背後からは鎧の数々。

急激に吹いた強い突風で辺りのものが空を舞った。

刹那、鎧たちは地へ転がり、うめく。その手足からは多量の出血タン、と音を立てて地へ足をついたのはカルサだ。手には緋色の大刀。

その一連の風と同時にイリアは再び空を駆けた。

左右からはそれぞれ銀の閃光。その両方を軽々と避け、両腕を伸ばして銀を弾いた。怯んだ幹部らはその場に尻をつく。

イリアは床に足をつく一瞬に左の短剣をかざし、右の短剣を投げる。そして緋が散り鉄臭が匂う。

皮一枚で繋がった頭をつけた身体はごろりと転がり、眉間に短剣の刺さった頭はその両眼を見開いたまま。

休む間もなく銀の左翼は鎧に向かった。交差するようにカルサは眉間から短剣を抜いてイリアへ投げる。イリアは振り返ることもなくそれを受け取った。

再び戻った銀の両翼が散らすのは鉄と身体と緋血。それらに混じ

る白いモノ。それは粉碎された頭蓋骨から飛び出た脳漿のうしょうだ。

「お、おのれええええ！」

急に背後で声がしてカルサは反射的に振り返る。そこには剣を振りかざす鎧の男。カルサは突然の出来事に身動きが取れない。

殺される。

そう思った瞬間、鎧が目の前で崩れた。見れば胸元からは銀の切っ先。

「イリア！」

短剣を抜いた傷口から血が噴出し、呼ばれた者の顔を染める。その光景に、カルサは身が震えた。

視界の横で何かが駆けて行くのが見えた。今度こそはとカルサはそちらへ向かう。けれどそれよりも早くイリアが胸元のナイフを放った。

後頭部にナイフの刺さった身体が崩れる。

それと時を同じくして、その場に立つ者はイリアとカルサのみになった。

時間にしておよそ十数分。息をする者は居ないか見回すイリアを、カルサは声もなく凝視していた。

転がる死体の数は二十五。それもガタイの良い、強面の男ばかりだ。それをたった一人の少女が全て消してしまった。息をする者などは居ない。

カルサは声を出すことができなかった。

自分は何もしていない。ただ、敵の動きを封じ、本当に少しの手伝いをしたただけだ。

これが格の違うということなのか。

震える右手を、やはり震える左手で抑える。この震えは、恐ろしさからではない。でもなぜ震えるのか分からない。

長いマントの裾で顔を拭ってイリアはカルサの元へと足を進める。

「怪我は？」

声の出せないカルサは、緋色の短剣をそれぞれマントで拭い、鞘におさめるイリアへ大きく首を横に振る。

「そう」

抑揚のない声が返り、気付けばその美麗な顔に表情はない。

「見つかる前に戻るよ」

言って、駆け出すイリアの後をカルサも追った。

固くて冷たい屋根の上。

撫で去る風は身体を刺すように吹き去ってゆく。差し込む光は閉じた瞼の上から容赦なく照らしつける強いもので、けれどそれは今の自分にとっては明るくも何ともないものだ。

ふわりと落ちてきた葉を手にとる。広げればそこには黄色の残骸で、直ぐに風が奪い去っていく。

ごろりとイリアは寝そべった。

鉄格子のように冷たい空へ秋色の葉が風に飛ばされていった。くつきりと落とす木の影とは対照的に、スローモーションで高く高く舞い上がっては見えなくなっていく。

眩しさに目を細めるが、閉じればそこには闇が広がる。けれどまるで砂の花びらのように散って行く赤い葉が緋の血と重なり、抵抗を止めてイリアは瞳を閉じた。

どれほどの時が経ったのだろうか。

ふいに、足元から声が出た。

「イリアー。報告会始まるぞー！」

届く声は年上の相棒のものだ。

珍しく素直に身体を起こして下へと顔を覗かせた。

「カルサ、邪魔」

「え？おわっ」

返る声を聞かぬうちにイリアは屋根から飛び降りた。音を立てず

に着地して大あくびをしながら家へと入る。二分と経たぬ内にマントを羽織りながら再び戻ってきたイリアに、カルサは驚いて呟いた。「今日はやけに素直だな……」

すたすたと歩いて行くイリアの背中はいつもと何も変わらぬというのに。

けれど不変など、実際ありはしないのだ。

人は常に流れに身を任せ、心の形態を変えてゆくもので。それは誰であれ同じことだ。

冬の近づきを知らせる風がまるで刃のように強く吹き抜けて行った。

白一色の司令塔。

やはり目の前には金の蜘蛛を持つ者とその間には副総長。そして左右から刺さる視線は銀の蜘蛛を持つ者のものだ。

「昨晚はご苦労だったな。イリア、カルサ」

白色の口ひげを動かして副総長は続ける。

「アイリスカ幹部ら他計二十五名の死は確かに確認された。本当によくやってくれた」

その表情こそ常と変わらぬが、声音は明らかに他人の死を喜んでいる。気にしない素振りでイリアは「光荣です」と頭を下げ、カルサもそれに習う。

「報告書は明日までに提出するように。少し休みなさい。それと特別報酬を出そう」

副総長がそう言うと、二人の金の蜘蛛を持つ者の内の一人が小さな木箱を差し出した。開ければそこには十枚束の金貨が二つ。

「受け取りなさい」

床に膝をついてイリアとカルサはそれを受け取る。心なしか、ずしりと重くカルサには感じた。

自分は何もしていないのに。

そう思うと、余計にこの手の金貨が重く感じられて。次にはカルサは声を上げていた。

「あのっ、やっぱり俺は受け取れません！」

そして金貨の乗る手を副総長の前に突き出す。副総長は不思議そうに問うた。

「何故かね」

「俺は何もしていません。全部、イリアの功績です」

見つめる先には幼い頃から恐れ、敬い続けた副総長。横からバカ、というイリアの呟き声が聞こえた気がしたが、どうしても金貨を貰う気にはなれない。

「本当に何もしなかったのかね。それは補佐もしなかったと取るが？」

「いいえ、カルサは充分補佐をしてくれました。今回の任務は、彼が居なければ失敗に終わっていたでしょう」

カルサが口を開くよりも先にイリアが進言した。

彼は知らないのだ。命を遂行できなかった者には死のみが待つということを。

「イリアはそう申しておる。受け取りなさい」

「できません……」

「受け取って！」

拒否の言葉を口にしようとしたカルサに小声でイリアは言う。それを耳にしたカルサは渋々と金貨を引いた。

「……ありがとうございます」

「今後とも日々里のために精進するように。下がちなさい」

深く頭を下げて二人は部屋を出た。不服そうな表情を浮かべるカルサの足をイリアは思いつき踏みつける。

「いだっ！」

「バカなことすんな」

「は!?!」



そのまま、彼女は会議に参加するためまた中へと戻っていった。

外では秋虫の声が響いている。

既に固く乾いた足元の土では蟻が一直線に並んで何かを運んでいた。きつと冬支度をしているのだろう。踏まないようにそれを跨いでカルサは司令塔へと急ぐ。

急な風が吹く。赤や黄の葉を天に散らしながらカルサの金の髪を乱してそれは過ぎていった。

ひやり、と冷たい石モザイクの床。

白い大理石の壁にはくり抜かれたように四角い窓が転々と並び、その下方には色彩の少ない布が貼られて多少の寒さが和らげられている。布には白と黒を主にした糸で里の歴史が刻まれており、それは円柱状の建物の壁をぐるりと一周して階段の手すり下へと続く。

カルサはぼうとしたまま手にした報告書を持ち直すとそれを目で追いながら最上階へと足を進めた。

コツコツ、と石の階段が響く。真っ直ぐ大会議室へと向かう冷たい白の廊下の窓を、名の知らぬ鳥が群れをなして横切って行くのをぼんやりと見つめる。空は紫色のマーブル模様だ。

厚い青銅で作られた扉に手を掛けたちようどその時、中から声が聞こえ、カルサは思わずその手を止めた。

「やりましたな副総長。これでアイリス力は我らのものです」

「うむ。これで行くやく私が西大陸全域の里を支配する礎が整った」  
「…は？」

思わずカルサは扉に耳をくっつける。『西大陸全域の里を支配する』？

部屋の中で声はなおも続く。

「ですが総長が既にお亡くなりになられたと皆が知ってしまったらどうするのです」

金の蜘蛛を持つ男が言った。五十半ばで、頭の頂きが少々薄くなりつつある厳しい顔つきの男だ。

「総長が死んでいたと分かれば混乱が起こるのは確かだ。それだけは避けねばならぬ」

立派な髭が上下に動いた。それを右手で撫でながら思案顔で椅子に背を預ける。その直ぐ後、もう一人の金の蜘蛛を持つ男が何かを思い出したかのように慌てて言った。茶の短髪に、同じ色の瞳を持った四十終わりほどの男だ。

「副総長。もしイリアに総長の死がばれてしまったら如何致しましょう」

カルサは息をのんだ。

総長は、イリアの父親だ。灰白の髪と蒼の双眸、鍛え上げられた肉体を持っていた彼は、四十という若さで総長になった。その気さくな性格から、歴代の総長の中で最も素晴らしい人物として皆に敬われている。

彼は総長となった後も、戦場の第一線で戦っていた。その姿は今でもカルサの心深くに刻まれている。ラスラで生きる全ての者たちが憧れてやまない、英雄のような存在だ。彼は三年程前から病で床に伏していると聞かされている。

今、この人たちは何と言ったのだろう。

「総長が死んでいた」

哀しみとも、怒りともとれぬ感情が溢れ、カルサは手が震えるのを止めることができない。息も上手くできない。

聴覚は部屋の中の声に集中し、他の音は何も聞こえない。息をしようと空気を吸い込むと、ヒュツと小さく気管が鳴った。

「知られる前に始末しておきたいものだが…。アレの力は我らにとつて重要なモノだ。むやみに失う事はできぬ」

「では、幽閉するというのは如何でしょう」

「馬鹿者。それでは始末するのと変わらぬではないか」

どうしたものか、と副総長が考える両脇で金の蜘蛛を持つ者たちが言い合う。

知らぬうちにカルサの手は固く握られていた。開くとそれは震えていて、再び握ることができない。

早く。イリアに知らせなければ。

カルサは思うが、震える手足に力が入らない。

「まあ今のままでも構わぬだろう。イリアの家は常に監視できる位置にある」

音もなく茶を飲み干すと、副総長は立ち上がって窓へと移動した。そこから見えるのは円形に広がる家並み。その最前にはイリアの家。それを見下ろして咳く。

「しかし何か策を考えねばならぬな……」

その眩きを全て聞かぬうちにカルサは足を踏ん張って走り出した。瞬間、力の入らない手に握っていた報告書の入った筒を落としてしまった。

ゴトツ、音がして、それは転がる。

そして刹那、部屋からはこちらへ向かってくる足音。取りに戻っていたら確実に捕まる。一瞬迷った後、カルサは報告書をそのままに階段へと持ち前の駿足で駆け出した。

イリアは殺されるかもしれない。もし今ここで自分が殺されてしまったら誰がそれを知らせるといのか。イリアを、みすみす殺させはしない。

直ぐに扉が開き、副総長が姿を現した。その視界には、ひらりと消える黒のマント。

足元に筒が転がって来、拾い上げて気付く。

「カルサ」

「え？どうされたのです？」

問いには答えず、副総長は慌てる茶髪の男に投げつけるように筒を渡し、もう一人の金の蜘蛛を持つ者に向かって命を下した。

「イリアを呼べ！」

「御意。イリアに始末させるのですか」

「そうだ。もしイリアが己の側近をも殺せるような者であれば、生かしておいても何の問題もないだろう」

なるほど、相槌を打って大きく頷き、金の蜘蛛を持つ薄髪の男はマントを翻して部屋を後にした。

参 shoot the moon 前(前書き)

注意! P G - 1 2 !

\*このお話には一部暴力描写、生々しい死体の描写がありますので自己責任の下でお読みください。読んでからの苦情は一切受け付けられませんのでご了承くださいませ。

参 shoot the moon 前

ドンドンドンドンドンッ

漆塗りの扉が大きな音を立てて震えた。

ベッドの上で東大陸のものだという書を読んでいたイリアは驚いて身を震わせる。

「イリア！」

聞こえた呼び声は己の最も近し者のもの。常ならば無視することも多々あるが、今日の声は何やら緊迫した響きを持っている。イリアは書はその場に置いたまま、足早に扉へと向かった。

「イリア！イーリーアー！」

いつものようにのんびりと聞き流されているのだろうか。中々出てこないイリアに、不安と焦りとが募る。

両の足はもう震えてなどないが、まだ震えているような感覚に襲われて、カルサは再度名を呼ぼうと口を開いた。

が、それを驚きと共に飲み込んでしまった。

右の肩に人の手の感覚と、後ろから聞こえた声。

「おやカルサ。そんなに慌てて何かあったのか？」

振り返れば、そこには薄髪金の蜘蛛を持つ男。その右手が伸びてきて、カルサは思わず身構えた。

やばい。そう思った直後、その手はカルサの横を通り過ぎ、漆塗りの扉を叩いた。

「え？」

顔を上げたカルサに向かって男は静かに笑みをつくる。

「すまん。私もイリアに用があるのだ」

拍子抜けしたカルサを他所に開かれた扉からイリアが顔を出した。

「カルサ、どうし…」

言いかけて、カルサの横にいる人物に気がつく。

「コルドバ殿」

「副総長がお呼びだ。すぐに司令塔に来なさい」

急な召集命令に少々戸惑いつつもイリアは頷いた。

「承知しました。カルサ、中で待ってて」

そしてカルサの反応も見ずにコルドバの後をついて歩きだす。

「まつ待て、イリア！」

とつさに掴んだ腕は細くて白い。

「何？」

明らかに訝しげな表情で向けられる双眸は灰と藍。

行つてはダメだ。このまま行つてしまつたら殺されてしまつかもしれない。けれどこのまま引き止めるのもまた、リスクを伴う。もし引き止めたら、この場でふたり共に殺されてしまうのだろうか。

コルドバは確かにあの場に居た。けれど全てを聞いてしまった自分ではなく、イリアに用があると云う。

その理由がカルサにはわからない。口封じをしなくて良いのだろうか。自分が聞いていたという事はばれてはいないのだろうか。

「カルサ。何でもないなら離して」

声につられて緩んだ手。その細い腕を振ってイリアはカルサの手を離し、再びコルドバの後をついて歩きだした。

窓の外は既に月が薄闇に紛れて顔を出し、その白い触手を四方に散らしている。風に吹かれる度に木々の葉が空に舞って、音もなく土に落ちる。その上を茶と白のまだら模様の猫が通り、葉はカサと音を立てて割れた。

その光景を映し出すのは、高くて白い塔から漏れる灯り。

大会議室のいつもの場所に座るのは副総長と二人の金の蜘蛛を持つ者だ。そして向かい合つて立つのは短い黒髪の、細身の少女。

普段とは違い、たった四人しかいない大会議室はあまりにも広く、声は隅々にまで響き渡る。年老いて濁つた副総長の声も、また然り。

「イリア。其方に緊急の命を下す」

「…は」

誰も微動だにせず、衣擦れの音さえ聞こえない。

深と静まり返つた部屋。

「其方の補佐役：カルサを暗殺せよ」

イリアは、自分の耳を疑つた。

大きな双眸は驚きのあまりさらに見開かれ、副総長から離れない。急に耳鳴りがしてふらついた。けれど背筋を伸ばして持ちこたえる。今、副総長が言つた言葉が信じられなかった。

そつだ、きつと聞き間違えた。だつて同胞を殺すなど、ラスラの方針ではない。総長がそつ決めたのだ。だからきつと、今自分は他の誰かと聞き間違えたのだ。

「…もう一度、お願いします」

紡いだ声はかすれていた。けれどそんな声でさえ、この広い部屋には響く。

そつして再度下された命も、うるさいほどに響いた。

「カルサを暗殺せよ」

息の仕方を忘れてしまったようだ。

嘘でしょう？と、紡いだつもりが、声になつていなかった。赤い唇だけが不安定に動く。

命は絶対だ。逆らう事があればそれは死に値する。そしてそれは己だけではなく、己の家族をも巻き込んだの罰となる。

けれどカルサは、イリアの最も近い者だ。

三年前、彼が自分の補佐についてからずつと共に行動してきた。命を張つた仕事も、いくつかこなした。

だが、いつしか彼を危険な仕事に連れて行かなくなった。カルサ



の命を護るために。

イリアにとって、カルサは兄のようであり、弟のようでもある存在になっていたのだ。家族と変わらぬ存在の者を、自分は殺さねばならないのか。

そんなことできるはずがない。したくない。

しかし、命に背けば自分の命が危ない。いや、自分だけではない。たった一人の家族である父の命だって保障はできない。たとえ総長であろうと、掟は絶対だ。

イリアは拳を握り締め、ゆっくりと床に片膝をつく。

「…御意」

声は、やはりかすれていた。

日は過ぎて、節はすでに神無月。

あとひと月もすれば鎮守の森で楓の葉が旋回を始める時期になる、秋の深まり。

晴れた昼の空は澄み渡り、雲の欠片も見つからない。風に舞う葉の数は次第に減って土を隠す量は増える。

己の庭に植えられた一本の大木にはまばらに葉が残り、風が吹くたびに揺られて落ちる。

カルサはそんな大木に登り、その太い枝に腰掛けて呆としていた。副総長たちの会話を聞いてしまった日から、もう大分日が過ぎた。けれど自分の身には未だ何の危険も起きてはいない。むしろ不安を抱くほどに平穏だ。

未だ無事だという事は、自分が聞いていた事実は誰にも知られては居ないのだろうか。しかし報告書は落としたまま放って来てしまった。ばれていない筈がない。

あれから、イリアと自分は行動を共にしなくなった。

何度もあのことをイリアに話そうとしたがその度に誰かに見られ

ているような気がしてそれもできず、イリアは仕事を立て続けにあるからとあまり顔を合わせる事もなく何日もが過ぎてしまった。あの日以来、頭の中を支配するのは副総長たちの会話ばかりだ。

戦国乱世のこの世の中では、いかに領を拡大するかが重要だということではカルサだつてわかっている。そのために自分も度々戦にかり出された。手柄を上げようと息む敵武者の攻撃をかくぐり、里のために命をかけた。

内陸の南に位置するラスラの勢力は北へ北へと拡大し、西の海岸をも征服した。いまやそれは西大陸のほぼ半分の広さだ。副総長は、幹部たちは、それでもまだ足らぬというのか。

西大陸全域を支配するには、東側を支配するグディアを倒さねばならない。その鍵となるのがアイリスカだ。

西大陸の二大勢力といわれるラスラとグディアのちょうど間に挟まれてしまったアイリスカが、カルサは可哀相でならない。けれど同時にこの戦国乱の世では仕方がないことだとも思う。

アイリスカの中でグディア側を推す者はもう居ない。だからラスラが西大陸全域を支配するのも、もう時間の問題だろう。

しかし、西大陸全域を支配したところで一体何になるというのか。東大陸や、北大陸、南大陸とも戦をするつもりなのだろうか。

里は所詮、国に属する兵でしかないというのに。国にとって里は、戦に勝つための道具でしかないというのに。

いつしか冷たくなっていった風に、ようやくカルサは気付いた。短い金髪をなでるその強さも増していたので、まるで猫のような身軽さで木から飛び降り、難なく着地する。

普段あまり使わない頭を使ったせいかな、こめかみに鈍い痛みを感じる。

重い気分のまま見上げた空は、恨めしいほどに晴れ渡っていた。

その日は、朝から雨が降っていた。

夕方になり、晴れた日であれば太陽が濃い金色の光を放って姿を隠す時刻になってもそれは止まず、どんよりとした雨雲が今も空を覆っている。傘を差して、茶髪の金の蜘蛛を持つ男の後をイリアは付いて歩く。

司令塔に呼ばれた理由はわかっていた。

「今回は随分と仕事が遅いようだな、イリア」

しわの刻まれた両の手を組みながら紡がれる声が痛い。

同時に感じる威圧感に押しつぶされそうだ。

「…申し訳ございません」

声は、震えてはいたがかすれることなく確かに響いた。

情けない声。そう思うと自然と自嘲の笑みがこぼれた。それと同時にフツと身体が軽くなるのを感じる。指の震えは止まり、呼吸が楽になる。

「命に背いた者への掟は分かっているな？」

見据える副総長の左目は白く濁り、落ち窪んだ瞼は年齢を感じさせる。

「はい」

声は、もう震えてなどいなかった。

「では、速やかに命を遂行せよ」

しかし、その声に再び威圧感に苛まれた。

落ちて着こうとし、瞼をゆっくり伏せて呼吸をくり返す。開けた双眸に一瞬映ったのは、細かく震える己の睫毛。

「承知」

声は、冷たく激しい雨の音と共に響いて消えた。

それからさらに数日が過ぎてしまった。暦は神無月の十日。よく晴れた小春日和の一日はもうじき終わろうとしている。窓の外を見

ればもう太陽は山あいにも頂がちらりと見えるだけだ。僅かに雲が流れる空をぼんやりと見つめ、その明るいオレンジを消すようにイリアは戸布を閉めた。部屋が一気に暗くなる。

暖炉に薪をくべ、しばらくするとそれを火が覆ってパチパチと爆ぜだす。

カルサ暗殺の命を下されてから数週。

未だにそれを遂行できてはいない。

これは、常に緻密で綿密な計画のもと、迅速に仕事をこなしているイリアでは考えられないほど遅いことだ。

最も無駄がなく、かつすばやく暗殺できる方法が思い浮かばない。

この数週、カルサを殺すチャンスはいくらでもあった。

何度か会うこともあったし、彼の家は自分の家の裏手にある。寝込みを襲う事だってできた。

だのに殺せなかった。

自分の父のことを思えば、何を躊躇うことがあるのか。

父は、血の繋がりのない自分を拾い、育ててくれた大切な人だ。

左右で違う瞳の色を厭わず、暗殺者になることを決して許そうとはしなかった父。

左手に蜘蛛を彫るのを最後まで反対したのは父だし、戦に参加するのだって毎回大反対されながら無理矢理ついに行った。

もともと身体能力には優れていたため、暗殺術は父が訓練するのを横で見ながら真似をして覚えた。

その全ては、父に恩を返したかったが故。

だから誰よりも仕事をこなし、着々と位を上げ、力をつけ、そうしている内に気がつけば銀の蜘蛛を手にするほどにまでなっていた。きっと父は喜んでくれると思うって仕事を続けていた。けれど紫の蜘蛛を受けたときも、青の蜘蛛を受けたときも、父は笑顔を見せてはくれなかった。

そうして三年前、銀の蜘蛛を受ける三月ほど前。

父が病で倒れたと副総長に聞かされた。何十年も戦の最前線で戦

っていた疲れが出たのだろう、と。そして言われた。父は、イリアが力をつけて行くのを本当は喜んでいたので、と。それを顔に出さなかつただけだ、と。

だからこれからも里のために頑張りなさい、副総長はそうイリアに告げた。そのときの事は今でもはつきりと覚えている。

父を喜ばせる為だったらどんな仕事だって片付けられる。それが父の病を治す最良の手だと信じているから。

だったら、カルサを暗殺する事だって簡単ではないか。

命に背いた者には、死。家族も共に。

父を喪うわけにはいかない。父は、自分の命の恩人だ。生きる総てだ。

意を決して、イリアは暖炉の火を消した。

**参 shoot the moon 後(前書き)**

注意！PG-12！

\*このお話には一部暴力描写、生々しい死体の描写がありますので自己責任の下でお読みください。読んでからの苦情は一切受け付けられませんのでご了承くださいませ。

## 参 shoot the moon 後

月は、生まれ変わる前の最後の姿。下弦の月。

薄く細く伸びる白い光は、地には届かず影を作ることはない。自分が今どこにいるのかさえ解からなくなるほど強い衝動に揺らぐ子の刻（午前零時過ぎ）。イリアはひらりとマントを翻して家を出た。家と家とを仕切る低い柵を越え、音を立てずにカルサの家に忍び入る。

真つ暗で、灯りの一つもない家の中。目が慣れるまでそこから一歩も動かず、慣れてようやく寝室を目指す。

音もなく部屋へ踏み入ると、標的となる人物は布団をかぶって夢路に向かっていた。規則正しく聞こえる寝息は深い眠りに落ちている証拠だ。

すらりとイリアは右の太腿から短剣を抜いた。研ぎ澄まされた切っ先は微かな光をも反射させて闇に散らす。

いくら昼は小春日和だったといってもやはり夜は冷え込む。足袋の爪先が氷のように冷たくなり、既にその感覚がなくなっている。短剣を握る指先もまた、冷え切つて雪のようだ。

一度、大きく呼吸をすると吐いた息が白くなって消えた。もう一度それを繰り返し、白い息が消えると同時。タンツと小さな音を立ててイリアは床を蹴り上げた。

僅か一步で標的の真上へ。重力の法則によつて落ちる身体は、音もなくその上に着地した。短剣の切っ先が勢いよく喉元を狙う。

が、それはその直前でピタリと止まった。その格好のまま、イリアは微動たりともできない。ひそめる息はいつしか虫のように細く小さくなっていった。

あとほんの少し押し込めば、命は無事成功し、父の命は助かるというのに。

そうこうしている内に標的がうすらと目を開けた。直後、彼の意

識は覚醒する。

嫌でも視線は絡み合い、瞳の色まで分かってしまう。

イリアは目を瞑り、開くと同時に短剣を大きく振り翳した。カルサは思わず身体を強張らせる。ぎゅっと目を瞑り、覚悟した。刹那、頬に当たる冷たい風の感触。

ドス、という鈍い音がした。

けれど来るはずの痛みを感じない。不思議に思っただけで恐る恐る目を開けると、そこには信じられない光景があった。

「イリア!？」

カルサは慌ててその細い肩を両手で掴む。

「…できない…」

呟く少女の、雪雲色の右目と、雨夜色の左目からはらはらと零れるのはきらびやかな雫。

イリアが涙を流すのは初めてだった。

どうすれば良いのか分からず、動転した頭でカルサは必死に考える。

とりあえず、名を呼んでみた。

「イリア」

直ぐに返った声は常のものより弱くて小さい。

「ごめん…カルサ」

止まらぬ涙を必死で止めようとするイリアを、カルサは強い力で自分の腕に抱え込む。しばらく背をさすってやっていると、イリアは落ち着いたようだ。ゆっくりと身体を離し、床に落ちた短剣を鞘におさめる。

紅い唇から再び紡がれる言の葉。

「ごめん」

カルサは安心させるように笑顔でくしゃりとイリアの髪を撫で、次には真剣な面持ちで向き直った。

「イリア、何で…」

けれど最後まで言い終わらぬうちにその先が読めてしまったイリ



アはびくりと身を震わせる。

「…副総長から、命を授かったから」

答えた細い声を聞いて、カルサは息を吐いた。やっぱりそうかと心中で呟く。

「ごめん、カルサ。あたし、命に背くことができないんだ」

「え？」

「命に背いた者は、死。家族共に。その掟は絶対だから、あたしは命に背くことができない」

カルサが何かを言う間も与えず、イリアは続ける。

「だからカルサ、逃げて」

見つめてくるのは雪が降った日の朝のように冷たい、不思議な双眸。

そして訪れた沈黙を、カルサは破る。

「それは、なんで？」

その答えを、本当は知っている。けれども問うのは、イリアの口から聞きたいからだ。

イリアの視線が思索するように泳ぎ、紅い唇が音を成さずに動く。何度目かで零れ落ちた声。

「…父さんを、喪う訳にはいかないんだ」

言葉と共に瞳は伏し目がちになり、長い睫毛が僅かに揺れる。

今度はカルサが視線を泳がせる番だった。

イリアに真実を話してしまって良いのだろうか。

自分が聞いてしまった全てを話すつもりでいたのに、声が詰まってしまうてできない。

迷って、考える。そうしてようやく顔を上げた。

「イリ…」

「お願い。カルサ、逃げて」

遮って紡がれた声には緊迫さを感じられて、カルサは思わず声を飲み込んでしまった。

灰と藍の瞳。左右で違う、澄んだ双眸。

それと真っ直ぐに視線を合わせ、ゆっくりとカルサは口を開く。

「イリア。落ち着いて聞いてくれ」

再び手を置いた肩は、少しの衝撃でさえ折れてしまうのではないかというほどに細い。

重大な事実を告げる緊張から、心臓が大きく脈打つ。自らを落ち着かせるように大きく息を吸い込んだ。

「総長はもう、死んでしまったんだ」

イリアは一瞬、全ての音がなくなってしまったような感覚がした。  
「う、そ…だ」

長い睫毛が大きく揺れ、小さく開かれた唇が微かに震える。

「嘘じゃない」

「嘘だ！」

「嘘じゃないんだ。だから俺は副総長に命を狙われてる」

「…」

カルサは静かに、自分が聞いた話を語りだした。

悲しそうに、辛そうに、時折身を震わせながらイリアは黙って聞いていた。いつしか布団についた両手は、指の先が青白くなるほどにそれを握り締めていた。

そして全てを話し終えたカルサが一息ついたと同時。ゆっくりとイリアが口を開いた。

「…副総長は西大陸を支配したいが為に父さんを殺したって言うの…？」

「俺には副総長の真意まではわからないけど、多分」

「じゃあ…あたしはどうすればいいの？また独りになっちゃうの？父さんがいないなら、あたしには生きる理由がない！」

布団に大きな染みが一つでき、続いて二つ三つとそれは増える。

「一族を追放されて、寒くて暗い森の中でずっと独りだったあたしを拾って育ててくれた。父さんは、あたしの命の恩人なんだ！その恩を返すために今まで生きてきたんだよ！父さんがいないなら、あたしはどうやって生きていけばいいって言うの…！」

一気にそう言うと、イリアは声を殺して泣き始めた。カルサはしばらく背をさすりながらイリアが泣きやむのを待っていたが、ふとイリアの言葉を思い返して気がついた。

「イリア、一族を追放されたって…?」

今の言葉は、カルサにはイリアは総長の本当の娘ではないという響きに聞こえた。

黒のマントで涙を拭って止め、止まらない嗚咽を消すように大きく息を吸ってイリアは告げる。

「あたしは、全てが終わる島の出身だから」

全てが終わる島。それは、西大陸の東海岸にある島の通称だ。その名はイグナル。そしてそこは東海岸で最も大きな国、アベンシアの領土だ。そこには、ある一族が数百年にも渡って生活している。

その一族の名は、

「エメルフィード…?」

西大陸でその一族を知らぬ者は誰一人としていない。

それは、最も有名な魔法使い一族の名であるから。

「そう。あたしはエメルフィード出身。だけど、追放された」

先程とは打って変わって、抑揚のない声だ。

それはいつものイリアの声音。

「なんで…?」

問うカルサに、イリアはどこか悲しげに笑った。

「分からない?」

揺れる痛みのない黒髪。

「目の色が左右で違うから」

笑みを作る口元が何だか儂げだ。その双眸の強い光に目が離せなくなる。

イリアは黒のコートを脱ぎ、服の左袖を引き千切った。

そこに現れたのは、肩から手首の先にまで広がる赤い痣。よくみればそれは首元まで続いているようだ。

「これは、死の呪。背中の全体にまで広がってる」

「死の呪？」

「これを刻まれた者は本当なら即座に命が尽きる呪いの名前だよ」  
言って、再びコートに腕を通す。

「でもあたしは死ななかつた」

フ、と自嘲気味に嗤う。

「助けられたんだ。ある人に」

夜風が窓をカタカタと鳴らす音が妙に響く。

泣いて腫れぼつたくなつた瞼を一度下ろして、イリアは続けた。

「生きなさい。この呪いが、体全てを蝕むその日まで。そう言つてあの人があたしを鎮守の森まで飛ばした」

未だ耳に残る、あの優しい声。

温和な顔立ちに、柔和な笑みで言ってくれた言葉は、イリアの心深くに刻まれている。

「アーリファエル・エメルフィード」

イリアがそう口にした一瞬、ビリ、と空気が震えた。それはその者の魔力がひどく大きいという証だ。名を言霊にするだけで空気が震えるほどの魔力を持つ者はそう多くはいない。

「それが、その人の名前。エメルフィードの中で最も強くて、優しい人」

外では、木々を荒く撫で去る風の音。

イリアは話しながらだんだんと俯いていった。だからカルサはその表情を見ることができない。

「イリ……」

「カルサ、お願いがあるんだ」

呼びかけるカルサの声を遮り、イリアは顔を上げた。

カルサの茶の双眸と、イリアの灰と藍の双眸が絡み合う。

「…何…？」

かすれた声は微かに震えていた。

「どこかに、逃げて」

やっぱり。心内で呟いてカルサはゆっくりと息を吐いた。

「逃げて、隠れて。東海岸へ行くといい」  
「嫌だ」

「それかイグナル島。アーリファエル様に手紙を書くから持って行って。きつとかくまってくれる」

「行かない」

「今夜、もうすでにあんたは死んでる事になってるから。…ううん、違う。カルサ・ヘルデはもう、どこにもいない事にするから」

カルサの拒否の言葉を聞かず、イリアは息もつかずに言った。そして、真っ直ぐにカルサを見つめる。

けれどカルサは目を強く瞑ってしまう。決してその真剣な眼差しに耐えられなかったからではない。イリアに対して爆発しそうな怒りを押さえる為だ。

「絶対に嫌だ。俺は逃げたりなんかしない」

「でも！カルサはもう死んでるんだよ！」

「俺は生きてる！死んだかどうかはお前しか分からないだろ！」  
風の音が強い。残り少ない葉も、今夜の強風でほとんど散ってしまっただろう。

哀しげに叫ぶイリアと怒りが頂点に達したカルサは互いに睨みあったまま動かない。

しばらくして、イリアがゆっくりと口を開いた。

「…だからこそだよ。」

「え？」

「あたしは、カルサ暗殺の命を受けてからずっと監視されてる」  
それを聞いてカルサは視線を揺るがせた。動揺を隠すことができない。

「多分、あたしがカルサを殺せるのかどうか試してるんだと思う」  
「…あ…」

だから。だから、イリアは自分を避けていたのだろうか。  
会うことがなければ、言い逃れができるから。

監視の視線に気付いていたイリアと、気付いていなかった自分。

カルサは改めて、イリアとの能力の差を思い知らされた。

「…イリアは」

自分が思ったよりも発した声は小さかった。

「イリアは、どうするつもりなんだ」

けれどイリアに届くには充分だったようだ。

薄闇の中で、一度とて見たことのないイリアの柔らかな笑みをカルサは見た。

「逃げるよ」

**肆 the crimson moon 前(前書き)**

注意！PG-12！

\*このお話には一部暴力描写、生々しい死体の描写がありますので自己責任の下でお読みください。読んでからの苦情は一切受け付けられませんのでご了承くださいませ。

肆 the crimson moon 前

鎮守の森を越えた、深い深い森の奥。

そこに、古びた木造の倉庫があった。

長い間誰も使っていないかった様子なそのの、風通し用に造られた小さな窓には板が張り付けられており、所々穴の開いた屋根には薄い鉄板でつぎはぎがされている。

ここは隙間風が厳しくて正直しんどい。

しかし文句の一つでも言おうものなら容赦なく殴り倒されるであろうから毛布に包まって耐えしのぶ。

三日ごとにまとめて運び込まれる食料はすでもう残り少なく、腹の虫が騒がしく鳴き立てるが、大量に汲み置きをした井戸水を飲んでごまかす。

カルサは寒さと空腹で半分涙目になって力なくその場に転がった。ここへ来たのは二週間前だ。

あの夜。あの、下弦の月の夜。

何も持たぬままイリアに連れられて来た。

ここは何だと問えば、倉庫だと分かりきった答えが返り、逃げるのではなかったのかと問えば、まだやる事があると言われ、壊れた扉を釘で打ちつけて彼女は去って行った。

「訳分かんねえよ……」

誰にともなく呟き、ごろりと寝返る。

四畳半程の空間。床は腐り、三つほど積み上げられたカビの生えた藁ではねずみが生活している。

壁の隙間から入る太陽の光で一日が過ぎるのを感じながら、カルサはまた一本、壁に線を書き足した。

線の数がかぞえて十五。



白い大理石の司令塔。

そこではいつものように銀と金の蜘蛛を持つ者と副総長によって、報告会が開かれていた。

正方形に並べられた机の席に座って、退屈で仕方のない仕事の報告を聞きながらイリアは欠伸を一つ、噛み殺す。

しばらく命を授かっていないイリアはここ数日で急に増えた報告会に甚だ迷惑していた。

面倒臭い。これに尽きる。

けれどそうも言ってはられない。報告会が増えたという事は、ラスラに回ってくる暗殺の仕事の量が増えたということだ。

それは、ラスラの暗殺業を営む里としての階級がさらに上がったということ。

このままでは着実に西大陸征服へと駒を進めていってしまうだろう。

そんな事は決してさせない。

そう心に誓ってイリアは報告会が終わると同時に司令塔を飛び出した。

その日の午後。

大きな紙袋に食料を入れるだけ詰め込み、イリアは森を歩いていた。日に日に北からの冷たい風は強くなり、鎮守の森では楓の葉の旋回が始まっている。

旋回する葉を避け、地に落ちた葉を踏みながら、イリアの歩幅は段々大きくなり、歩くスピードは速くなる。ついには小走りの状態になって、イリアは倉庫を目指した。

ひたすら走って、ついた頃にはもう日は傾きかけていた。

朽ちかけた倉庫。その扉をミシミシ言わせながらゆっくりと開け

る。

同時に、何か大きなモノがイリアの手から紙袋を引ったくった。慌ててイリアはそれを奪い返し、扉を閉めて袋からろうそくを取り出す。薄暗い中でそれを皿に立て、手をかざすと小さく音を立てて炎が上がった。

「…イリアはやっぱ魔法が使えんのか？」

それを見た大きなモノ、カルサの素朴な疑問には答えずに、イリアは再び紙袋の中に手を伸ばして細長いパンを取り出す。

「はい、カルサ」

カルサは受け取りながら即座にかぶり付いた。

その様子を半ば呆れがちに見やり、イリアは持って来た食料をきちんと一食分ずつ小分けにしてやる。その作業が終わる頃にはカルサは今日の夕食分にと分けた食料をほとんど平らげていた。

「使えるよ。少しなら」

「へ？」

突然イリアが言い、カルサは何のことだか考える。

「さっきの質問。魔法は少しだけなら使えます」

火を付ける位しかできないけどね、と付け足してイリアは紙袋から封筒を取り出した。

「はい」

「何これ」

「手紙。アーリファエル様に」

「はあ？」

「この間言ったでしょ。かくまってくれるようお願いの手紙書いたから明日中に出発すること」

「ち、ちよつと待て！」

イリアの顔の前に掌を向けてストップという動作をし、どんどん話を進めるイリアを止める。

「何」

イリアは訝しげに眉をひそめた。

そんな彼女の顔をちらりと見てカルサは言葉を考える。止めたはいいが、何と言おうか考えてはいなかった。

「…俺はそんなこと了解してない」

言ってしまうから、イリアを怒らせてしまいかもしれないと後悔した。でも確かに自分は一言も頼んでなどいないのだ。

「じゃあ…どうするつもり？」

声音は低かったが表情を見てカルサは少しばかり安心した。いつも通り無表情ではあったが、怒っているわけではないようだ。

「それは…、まだ考えてないけど…」

「へえ」

一瞬、空気が凍ったかのような錯覚に陥った。反射のように嫌な汗が出たカルサは少々慌てて声を上げる。

「こ、これから考える！じっくり！すぐに！うん！」

そんなカルサに呆れたイリアは表情の変わらぬまま大きく息を吐いて、足を折って座っていたのをあくらに座りなおす。

「最近仕事の依頼が大幅に増えてるみたい」

さすがのカルサもその言葉には真面目な顔つきになった。言葉の意味を理解する。

「副総長サマの計画も大詰めに入ったってコトですか」

「でも、そう上手くはいかないんじゃない？」

イリアが口元に悪戯な笑みを浮かべて言った。訳が分からず、カルサは眉間にしわを寄せる。

「何で」

その言葉を聞いたイリアは待つてましたと言わんばかりにニッと笑みをつくった。

「あたしが邪魔するからに決まってるでしょ」

言葉の意味が分からずにカルサは目の下にしわを刻んで考える。しばらくして、その重大さに気付いた。

「え！？あ、あの、イリアさん…具体的には何を…」

問いつつも、自分の中では聞きたくないと呼ぶ声がある。

いつだってイリアはカルサでは考え付かないようなことをしでかす。過去の前例を踏まえてみても、彼女の行動パターンは本当によく分からない。

「知りたい？」

微笑む仕草は可愛らしいが、恐ろしいことを考えているのだろうとそれくらい的事は長年の付き合いから安易に想像できる。

知りたくないと叫ぶ自分がいるが、悲しいかな、気付いたときにはもう頷いてしまっていた。時既に遅し。

しかしイリアは何も言わずにすくと立ち上がった。

「教えるわけないでしょ」

扉に向かいながらいーっと年相応の表情を見せるイリアを、カルサは追いかける。

「ちよっ…イリア！何する気だ？」

イリアは今にも壊れそうな音を立てる扉を開き、軽い足取りで外へ出る。

「んじゃ、身体壊さないようにねー」

ひらひらと手を振り、体を反転させたイリアの腕を慌ててカルサは掴んだ。

「ちよっと待ってっ！」

引っ張られた力が意外に強く、イリアは驚いて立ち止まる。そしてカルサもまた、掴んだ腕のあまりにも細さに驚いた。そう言えば少し痩せたように見える。ちゃんと食事は取っているのだろうか。

「イリ…」

「カルサ、痛い」

眉間にしわを寄せて言い、腕を引く。

「あ、ごめん」

イリアは離された腕に手をやってさすりながら、やれやれと少し大げさに溜め息をつく。

カルサが何かを言おうとしたと同時に、タイミングを見計らったかのようにイリアは顔を上げた。

「じゃあね、バイバイ」  
花のような笑顔を残して。

**肆 the crimson moon 後(前書き)**

注意！PG-12！

\*このお話には一部暴力描写、生々しい死体の描写がありますので自己責任の下でお読みください。読んでからの苦情は一切受け付けられませんのでご了承くださいませ。

## 肆 the crimson moon 後

雪見月の四日。

今日の月はまだ未完成の小望月だ。

星は漆黒の空に宝石のようにきらめいて、見上げる人々の目を楽しませる。

昨日から銀の蜘蛛を持つ者たちは長期の仕事に出かけており、残る者は少ない。

いつもより静かで暗い夜だ。薄闇の中、鎮守の森の入り口に立っている人影は華奢だ。黒の仕事着を身に纏い、銀の刺繍が施されたマントを羽織っているその人物の名はイリア・エメルフィード。今年で十七を数える少女だ。

足元の葉を踏んで森の中へ進み、ちょうど十一年前、育ての親と出会った場所で足を止める。

柵岩の周りには楓の太木。そのうちの一本にそっと触れ、温もりを感じるように幹を抱きしめる。湿った皮に頬を寄せて目を瞑ると本当に木の鼓動が聞こえてくるようだ。

そのまま動かぬこと数分。ゆっくりと双眸を開き、形の良い唇でイリアは呟いた。

「ごめんね」

離れると同時に太い幹から炎が上がった。

足元に落ちていたまだ葉の残る枝を拾い上げて火を移し、それを反対側の木へ放る。

少しずつ炎が木から木へと移っていくのを確認して、イリアは元来た道を闇に紛れて走り出した。

目指すのは司令塔だ。

総長、副総長、そして金の蜘蛛を持つ者は司令塔に住まうのが掟となっている。イリアの標的とする者も必ずそこにいる。その人物のことを考えると知らず握るこぶしに力が入った。それが怒りから

なのか、悔しさからなのかはイリアには分からない。

誰にも気付かれずにたどり着くと、イリアは一気に上へと駆け上がる。足音は鳴らない。

ところどころに切り取られた窓からは輝く月と、きらきらしい星の光。

このまま目的の部屋まで突き進む予定が、二階と三階の間で見覚えのある影に阻まれてしまった。

蔵ついでつきの、金の蜘蛛を持つ者。コルドバだ。

「おや？イリアではないか。こんな時間に何用かね」

コツ、何食わぬ顔で階段を一步下りる。イリアは視線を逸らさずにマントの下の短剣へ手を伸ばした。

「…夜分遅くに大変申し訳ございません。副総長に早急にお話があるのです」

「そうか…。しかし副総長はもうお休みだ。私が言伝よう」

「いいえ。直接お話ししなければならぬことなのです」

また一步、足音を立ててコルドバが近づく。

「イリア、時と場合は考えねばならぬぞ」

「承知致しております。けれど緊急なのです」

そして、また一步、距離は縮まる。

イリアは引かない。引けない。静かに、太ももに括った短剣を握り締める。

「さあイリア、帰って休みなさい」

瞬間、コルドバの背後から銀の切っ先が飛んでくるのをイリアは見逃さなかった。一瞬で短剣を抜き、目前で刃を受け止める。

ガキイイーン…

甲高い音を上げて細やかな光が散った。互いに後退し、間合いを取る。

「さすがは副総長だ。そうは思わんか？イリア」

「お話の意味が分かりかねます」

けれどおおよその察しはつく。読まれていたのだ。



銀の右翼を構えるイリアに、コルドバは鼻で笑った。

「副総長はお前が今日奇襲に来ると分かかっておられたのだよ」

話す口調は優しげだが、声音は冷ややか。口元に実に楽しげな笑みを浮かべたまま、コルドバは続ける。

「有り難く思いなさい。副総長はお前が拾われた日を覚えてくださっていたのだ。お前は、そんなお方を殺そうとでも言うのか？」

「…お話の意味が分かりかねます」

再度同じ言葉を返したと同時にイリアはコルドバに向かって銀の左翼を抜き翳した。防ぎきれなかった敵つい肩から血が噴出し、コルドバはよろける。

戦線を離脱した幹部など、最早イリアの敵ではなかった。

果敢にも立ち上がって大刀を構え直したコルドバに、今度はイリアが嗤う番だった。

「私を甘く見てもらっては困ります」

コルドバが刀を振り翳す。しかしそれより一瞬速くイリアの短剣が急所を貫いた。

「ぐ…がああ！」

倒れてくるコルドバを軽い身のこなしで避けると、彼は抵抗する力もなく階段を落ちていった。

浴びたコルドバの返り血を拭うことなく、イリアは再び上を目指す。

拾われたばかりの頃はここで父と共に暮らしていた。暇を持て余していた幼い頃のイリアは司令塔のあちこちを探検したため、迷うことはない。どの廊下がどこへ繋がり、どの扉が何の部屋のものなのか。イリアは誰よりも熟知している。ここは言わばイリアの実家だ。

そうして辿り着いた三階。その一番奥が副総長の部屋だ。

隠れることなく堂々と扉を開けると、冷たい荘厳な空気の中、窓際に副総長が立っていた。その右手には愛用のサーベル。

副総長はゆったりとした動作で振り返り、まるで全てを見ていた

かのように薄い唇を歪ませた。  
「全く其方は可愛い同胞だよ、イリア」

突如、背筋を悪寒が走って、カルサは飛び起きた。

夕刻のイリアの表情が何度もフラッシュバックして、その度に足元がおぼつかない様な不安に襲われる。

イリアがあんな風に優しい笑顔を見せる事は初めてだった。

だからこそ、余計に不安になる。

水を飲もうと瓶に手を伸ばすと、もう空だった。面倒臭いが、目も覚めてしまったので井戸から直接飲むことにする。気だるげに立ち上がり、扉をこじ開けてカルサは驚いた。

真夜中だと言っのに空が明るいのだ。

目を凝らしてよく見ると、遠くで火事が起こっているようだ。あの方角にはラスラがある。

「っイリア！」

気がついたら駆け出していた。嫌な予感がする。

鍛え上げられた駿足を生かし、風にも似た速さで森の中を駆け抜けていった。

気配に気付いたときにはもう遅かった。一瞬にして自由を奪われる。両手を捻りあげられ、鈍い音を立てて短剣は床へ落ちた。

「金の蜘蛛を持つのは一人ではないんだよ、イリア」

「デアドル…殿…っ」

耳元で声がして、嫌な鳥肌が立った。

油断していたわけではない。標的とする副総長を目の前にして気が回らなかったのだ。

「やはりカルサを殺してはいなかったか」

副総長がゆるりとした足取りでイリアの方へと向かって来る。イリアは殺気をこめた目で睨みつけた。

「聞いたんだろう、すべてを。カルサをどこへやった？」

問う表情は至極穏やか。けれどそれは冷酷な顔を隠す仮面だとイリアは知っている。

「知っているのだろうか？ 答えれば其方の命は助けてやらんでもないぞ」

イリアは是とも否とも言わずに手を伸ばせば触れるところまで来た副総長を蹴った。

刹那、副総長はサーベルを抜き翳し、イリアを拘束するデアドル共々切り付けた。

戦闘能力に長けたイリアは反射的に身をずらし致命傷を逃れたが、イリアで死角になって動きが見えなかったデアドルはまともに磨き上げられた刃を喰らう。

それによって生じた隙をイリアは見逃さなかった。

デアドルが崩れるのと同時に己の短剣を拾い、副総長に斬りかかる。

甲高い金属音を響かせて薄闇の中で銀が散った。

音もなく床に降り立って間合いを取り、イリアは再び副総長に向かって煌く両翼を振り翳す。すばやい動作で副総長はそれを弾いた。その直後、イリアは腹部に鋭い痛みを感じる。小さくうめいてそこに手をやると、生暖かいモノが掌を濡らした。弾いた直後に斬り付けられたのだ。まさに目にも止まらぬ早業。

一瞬ふらりとよるめくが、何とか持ち堪えた。出血はそんなに酷くはない。

イリアは床を蹴り上げ、その一步で副総長の頭上へ移動する。右の短剣を真っ直ぐに付き立て、落ちてくるイリアを副総長は大きく薙ぐ。

弾かれるほんの一瞬でイリアは左の短剣を副総長の心臓に向けて

投げた。

しかし、ラスラの歴史に名を残すほどの武将と謳われる実力は本物だったようだ。刃は副総長の肩を削るだけで床に突き刺さった。

「総長の弔い、という訳か？」

片翼だけを構えたイリアに不敵に嗤ってサーベルを振りかざした。イリアは短剣で受けるが、重力の法則と大の男の力には敵わない。

己の剣が鼻先まで距離を縮め、副総長がさらに体重をかける一瞬前、腕の力を緩めてするりと床と副総長の間から抜け出した。

追うように振り返った副総長の鼻先に鋭い切っ先を衝きつける。

一気に形勢が逆転した。

「やはり、父を殺したのは貴方だったと言う事ですね」

暗い灰の右目と、深い藍の左目のそれぞれには憎しみと哀しみが滲んでいる。

その殺気で一瞬怯んだ副総長の間をについてイリアはその手からサーベルを払った。

「答えぬ事は、是と取りますがよろしいですか」

大窓からは小望月の輝かしい光。それを浴びて佇むイリアの黒髪はまるで黒曜石のようだ。

紅い唇は艶やかに煌き、滑やかな白い肌を彩る返り血も月光を反射する。

雪雲色の右目と、雨夜色の左目は仇を捉えて離さない。

長い睫毛に銀の粒子が纏い、僅かに揺れたと同時にイリアは副総長を貫いた。

声も出せぬまま副総長はその場に転がる。イリアはサーベルを拾い上げ、とどめと言わんばかりにそれを眉間に突き刺した。ずぶ、と音がして緋が溢れる。

こんな状態になってもまだ生きようとするのは人間の本能か。その身体はピクピクと指先が動き、幾度か足が上がっては床に叩き落ち、やがてそれは止んだ。

イリアはふらりとした動作で床に刺さった短剣を拾う。顔をあげ

たその時、突然目の前が真っ暗になった。よろめいて壁に手をつく。動いたせいで腹部の傷口が広がり、出血が酷い。それを意識した途端、最初に受けた傷が叫び声をあげた。思わず手をやると、そこから生温かい雫が滴る。

全身の力が抜けたイリアは纏う衣が壁とこすれる音を立ててその場に横になった。

二つの剣は床に転がり、月の光を反射して鈍い輝きを放つ。絨毯が敷かれた床に両の掌を押し当てて、イリアは呟く。

「カルサ……」

ボツと音を立てて大きな炎がイリアを包んだ。

同時に、司令塔のあちらこちらから炎が上がる。

鎮守の森はもう既に火の海だった。

けれどもカルサは立ち止まらない。炎の移っていないところを掻い潜ってこの先に見える司令塔を目指す。

ひたすら駆けて里へ出ると、炎は森から平屋へと移っていた。

慌てて逃げ惑う人々は死んだはずのカルサがいることに気付かない。人ごみを掻き分け、やっとのことで司令塔に辿り着いたカルサは愕然とした。

めらめらと燃えさかる炎が司令塔の至るところに広がり、その全体を包み込もうとしていたのだ。

カルサは根拠はないが、確信する。イリアは司令塔の中だ。

「イリア！」

叫ぶ声と共に司令塔へ駆けたカルサの腕を浅黒い肌の大男が強い力で引つ張った。

「もうダメだ、入んな！」

「離せっ！まだ中にイリアがいるんだ！」

振り返り、腕を払おうとするカルサの顔を見て大男は目を剥く。

「カルサじゃねえか！生きてたのか！どこ行ってた」

「そんな事はどうだっていいだろ！離せ！」

「それはできねえ。どの道あれじゃあもう助からねえさ」

ボンツと大きく爆ぜる音がして、二階の窓から火達磨が落ちてきた。そして三階の窓からは炎が飛び出し、四階へと移って行く。

それを見た大男はああ…、と落胆の声を上げる。

「諦めなカルサ。イリアはもう死んでる」

カルサはうなだれ、地に拳を叩きつける。鋭い石が刺さって血が流れた。

「…ふざけんな…」

肩が震え、涙が出る。

「俺は、信じねえぞ。信じて…なんか、やるもんか！…っ、ふざけんな！」

人々の叫び声も、炎が近づく音も、カルサの耳には届かない。

「イリア！」

声は、煙で暗く曇った空に吸い込まれていった。

伍 pine after shine (前書き)

注意！PG - 12！

\*このお話には一部暴力描写、生々しい死体の描写がありますので自己責任の下でお読みください。読んでからの苦情は一切受け付けられませんのでご了承くださいませ。

## 伍 pine after shine

見たことのない木々が生い茂る森をひたすら歩く。

深い黒の衣に羽織るのは同じ色のマントで、その肩には青い糸が散り散りになってほつれている。明るい太陽の下で映える金の髪に、濃い茶の双眸。

白い箱を大事そうに何度も抱え直しながら、カルサは山道を登る。先のほうに光が見えた。そして視界が開ける。

青々しい草原の中にぽつんと一軒、レンガ造りの家が建っていた。「やっと着いたぞ」

カルサは箱に向かって声をかけ、家へ向かった。

脇には澄んだ小川が流れ、壁に付けられた水車が回っている。外壁に貼り付けられた陶器やガラスの破片が太陽光を反射してきらきらと光る。こんな家をカルサは見たことがなかった。

心なしに緊張して扉をコンコンと叩くと、中から声が出てそれは開いた。

出てきたのはまだ年の頃は自分よりも上であろうが、まだ少女っぽさが抜けない女だ。

まるで朝日のように美しい髪は緩やかに波打つその色はオレンジ。大きな瞳は光の加減で金のように見える。整った顔立ちの美しい人だ。長い手足はゆったりとしたローブで隠されているが、布の上からでも細いことが分かる。

「何の御用でしょう？」

ふわりとした笑みで問われ、カルサはハツとする。見惚れてしまっていた。

「あの、俺っ、カルサ・ヘルデと言います。あの、アーリアエル・エメルフィードさまはいらっしゃいますか」

「はい、おりますよ。少々お待ちください」

彼女はその場で振り返り、家の奥に向かって声を上げた。



「お師匠様ーっ。お客さんですよ！」

少しして現れた人物を見てカルサは目を見張る。白い髪は大腿の付け根まで流され、額には銀のサークレットをしている。色取り取りの刺繍が施された衣を身に纏った彼は、温かな顔立ちをしていた。想像していたよりもはるかに若い。

「こちらの方です」

オレンジの髪の人に紹介され、カルサは慌てて頭を下げる。

「カルサ・ヘルデです」

「はい。アーリファエル・エメルフィードです」

その表情は柔和な笑顔。カルサは本人だと確信する。

「あの、これ…」

上着の内から手紙を取り出し、箱の上に置いて一緒に差し出した。受け取ったアーリファエルの表情が変わる。

彼は、信じられないと言った様子で呟いた。

「イリア…」

しばらくしてアーリファエルは軽く頭を振ってカルサを中へ招き入れる。漆塗りの椅子に座るよう促され、カルサは腰を下ろした。

アーリファエルも向かい側に座り、オレンジの髪の人に言う。

「フェリス、カルサくんにお茶をお出しして」

返事をしてフェリスと呼ばれた女は奥へ去る。しばらくの間沈黙が流れ、アーリファエルは静かに口を開いた。

「…手を、触らせてもらってもいいかな」

「あ、はい」

包まれた手は温かかった。アーリファエルは細かに呼吸をしながら真剣な面持ちで目を瞑る。

フェリスがそつと茶を運んで来たのが見えた。どうぞ、と言って芳ばしい香りのする紅茶を置き、小さく微笑んで何が何だか分からない様子のカルサに耳打ちをする。

「貴方の過去を見ているのですよ」

そつして再び奥に去って行った。

「…そうか…」

やがてアーリアファエルはゆっくりと目を開き、哀しげな笑みを浮かべてカルサを見た。

「カルサくん、本当にありがとう」

そして手紙の封を開き、出てきた二枚の内の一枚を見てカルサに手渡した。

「え？」

「これは君宛みたいだよ」

言われるまま、恐る恐る開く。

白の薄様には見慣れた文字が乱れることなく羅列していた。

カルサへ

まず始めに謝ります。ごめん。

カルサがこれを読む頃にはあたしはもう生きてはいないでしょう。許してとは言わないけど、分かってほしい。

あたしは、父さんのために仕事をしてきた。父さんがいないのなら、あたしはもう誰の命も奪いたくない。

でも命を拒否すれば殺される。逃げたって、あたしは特徴があるからきつとすぐに捕まってしまう。

だから、どうせ死ぬのなら、意味のある死を迎えようと思ったんだ。

カルサは、あたしのたった一人の大切な人だから。

絶対に護りたかった。

里が崩壊すればカルサを追う者はいないし、もう仕事をする必要はなくなるでしょう？

生きて、生きて、生き抜いて。

好きな場所に行つて、好きなことをすると良い。

あたしを、色んなところに連れて行ってよ。

カルサと過ごした三年は、本当に楽しかった。

ありがとう。じ。め。ん。ね。

イリア

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1155v/>

---

月光

2011年8月1日03時24分発行